社会参画力（持続可能な未来への責任）を育む 社会科，地歴・公民科学習の在り方

指導主事　恒松　龍治　　研究協力員　宇城市立松橋中学校　教諭　柴田　征宣
指導主事　簗　　義彦　　研究協力員　熊本県立南関高等学校　教諭　川崎　裕子
研究協力校　山鹿市立山鹿小学校　教諭　宮川　智可
研究協力校　山鹿市立山鹿中学校　教諭　五十嵐　健
研究協力校　熊本県立鹿本高等学校　教諭　佐藤　圭

１　研究の視点

(1) 視点１について

平成25年４月に策定された第２期教育振興基本計画によると，我が国を取り巻く危機的状況として，少子化・高齢化，グローバル化の進展，雇用環境の変容，社会のつながりの希薄化，格差の再生産・固定化，地球規模の課題への対応が挙げられた。日本の社会がこれらの課題に立ち向かおうとするとき，国民一人一人の「社会参画」は欠くことのできない要素である。しかしながら，ある調査によれば，米中韓の生徒たちに比べ，日本の生徒は「自らの参加により社会現象が変えられるかもしれない」という意識が低いという結果が出ている（**《引用・参考文献》を参照**）。

そこで，本研究では「21 世紀型能力における『社会参画力』（持続可能な未来への責任）を育む社会科，地歴・公民科学習の展開」という主題を設定し，「多様な価値観をもつ他者との対話」を学習活動の主軸に据えた。また，対話の内容を教科の本質に適う価値あるものとするため，単元及び各時間の学習課題として「当事者意識を生む問い」を設定した（図１）。

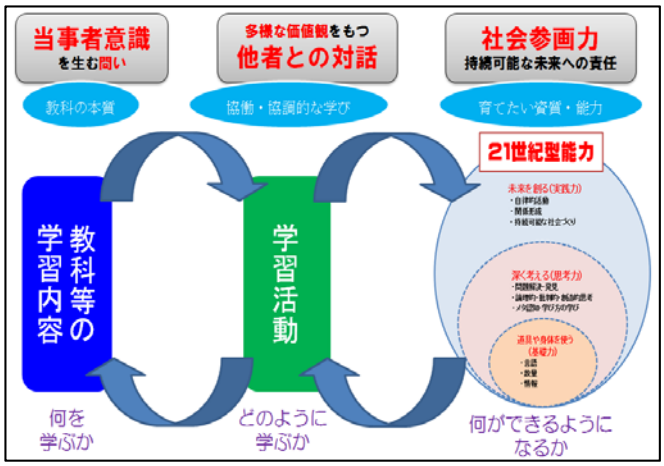


図１　社会科，地歴・公民科における 21 世紀型能力へのアプローチ

(2) 視点２について

社会科，地歴・公民科では，視点１でも述べたように「当事者意識を生む問い」を「多様な価値観を持つ他者との対話」を通して考える課題解決的な学習を設定した。そこで，課題解決へのプロセスを振り返り，「協働したことで，自分の考えがどのように変容したのか」を見とれるように，ワークシートを工夫した。また，対話により課題の解決策を練り上げる際には，思考ツールを用いてメタ認知を促し，価値の共有が図られるようにした（図２）。

図２　思考ツールを用いた練り上げの様子

(3) 視点３について

社会科，地歴・公民科では，単元を通して学ぶべき知識・技能を明確にして，その「習得」，「理解」を保障するだけでなく，自分の考えを伝え合う活動を設定し，すべての生徒が授業に「参加」し，習得した知識・技能を「活用」するようにした。

また，個人で課題に向き合う際や，グループで考えを伝え合う際に，考えるための材料を見極めて提供することで，より深い思考が促されるようにした。

さらに，教師が資料を提示して説明する際や，生徒が自分で書きこんだワークシートを拡大表示して発表する際などにＩＣＴを活用し，生徒一人一人の理解を助けるようにした。

2 研究の実際

検証１ 高等学校 第３学年「現代社会」
単元名 「労働問題」

(1) 本単元の授業設計

① 単元の指導計画

５ヶ月後に卒業を控え，生徒は進路先の決定にむけて日々努力をしている。このような生徒たちに，社会へ巣立ち，生き抜いていくための実践的な力をつけさせなければならない。しかし，多くの生徒が労働法規や労働問題の動向を身近なものとして感じることができていないため，まずは労働問題を自分自身のこととして自覚させる必要がある。そこで，単元の基軸となる問いを「自分が社会の中心となって働いているときに，どのような労働環境になっているとよいか考えよう」とし，課題意識をもって授業に臨めるように単元の指導計画を作成した。

表１ 単元の指導計画（３時間扱い）

次	時	学習活動	評価規準
1	1	○労働基本権の意義を確認し，労働三法の内容について知る。 ○ロールプレイを通して，労働三法が労働者の身を守るものであるということに気付く。	知識・理解① 単元テストで８割以上正解している。 関心・意欲・態度① 主体的にロールプレイに取り組んでいる。
	2	○資料から，失業率問題や非正規雇用労働者に関する問題などについて読み取る。 ○失業率，非正規雇用労働者の問題などについて，資料を活用して解決策を考える。	資料活用の技能① 資料から課題を読み取り，ワークシートに記入している。 思考・判断・表現① 問題に対する具体的な解決策をまとめることができる。
2	3 公開授業	○外国人労働者の受け入れの課題を解決する方策を考え，話し合う。 ○自分が社会で働いているときに，どのような環境になっているとよいか考える。	思考・判断・表現② 方策を考え，他者に伝え，他者の意見を聞くことができる。 関心・意欲・態度② 自分の考えを，具体的に論述している。

② 学習課題の設定

本検証では,「当事者意識を生む問い」について「対話」を通して課題解決を図る活動を中心的な活動に位置付け，各時間の学習課題を設定した。第１時の学習課題は「市場経済において労働者はどのような役割を担い，どのような権利を持っているのだろうか」，第２時は「現代の日本で発生している労働問題を知り，その解決策を考えよう」，第３時は「外国人労働者の受け入れを拡大するためにはどうすればよいか，考えてみよう」である。第１時では，労働基準法の学習をもとに，アルバイトの場面におけるロールプレイを通して，労働問題を身近に感じさせるようにした。また，第２時，第３時では，実際に就職した後の場面を想定しながら，生徒が当事者意識をもって課題に取り組めるようにした。そして，この３時間の学習を振り返り，学んだことを活用して，単元の基軸となる問いに向き合わせるようにした。

(2) 指導の実際

ここでは，指導計画の第１時と第３時について述べる。

第１時 労働問題を身近なものとして感じる

本時では，市場経済における労働者の役割や憲法に規定されている労働者の権利について学習した後に，生徒がアルバイトをしている場面を想定し，労働基準法に照らして問題がないかを，その生徒の立場になって考える言語活動を設定した。以下は，具体的な場面設定の例である。

- 下の事例に潜む問題点はどこですか -

Ａ子さんの場合

家計の足しになるように，ファミリーレストランでアルバイトを始めることにしました。面接を経て採用が決まり，土日，朝 10 時から昼３時まで働くことになりました。高校生なので時給は 650 円。勤務は 10 時からだが，30 分前に来て，制服に着替えて身支度を整えておくように言われました。遅刻すると 10 分につき 100 円の賃金カットがあるので，時間には注意するように言われました。店の制服と靴の代金は，最初の給料から天引きしておくとのことです。これから頑張りたいと思います。

生徒にとって身近な課題であるため，単元の最後に行った生徒の振り返りでも，労働者の権利を守る労働基準法の意義に触れる記述が多く見られた。

第３時　**対話の中で課題解決を図る【公開授業】**

①　目標

外国人労働者の受け入れについて，受け入れることの利点と課題について検討し，そこで明らかになった課題を解決する方策について考えを伝え合う言語活動を通して，社会的事象を多面的・多角的に考察する力や，社会に参画する力を身に付ける。

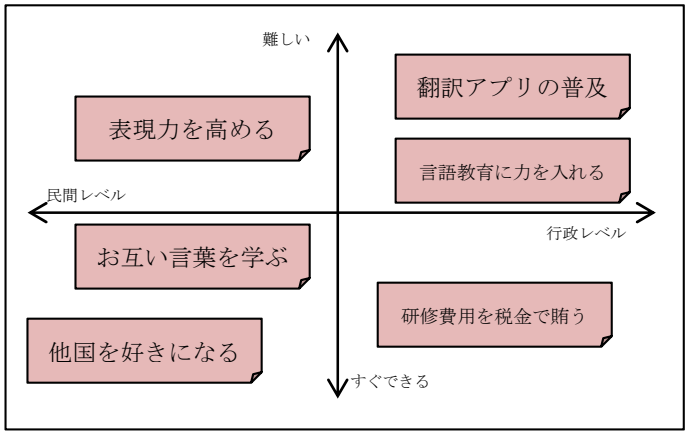
②　展開

過程	学習活動	指導上の留意点
導入 ５分	１　資料から高齢化の進行で，労働力人口も減少していくことに気づく。 ２　労働力人口減少への対応策を考える。 ３　本時の学習課題を確認する。 外国人労働者の受け入れを拡大していくためにはどうすればよいか，考えてみよう。	【視点３】 ICT を活用して資料を提示する。 【視点１】労働力人口の確保のために，外国人労働者の受け入れを検討する必要があることを生徒から引出し，学習課題に当事者意識をもたせる。
展開 38 分	４　外国人労働者の受け入れを拡大するメリットを考える。 ５　外国人労働者の受け入れを拡大する際に起こりうる課題を考える。 ６　学習課題について話し合う。 (1) 個人で対策を考え，付箋紙に記入する。 (2) グループで考えを伝え合い，まとめる。 (3) グループの意見を発表する。	【視点１】 個人で課題に向き合い，考える時間をとった後に，考えたことを伝え合う活動を通して，課題を多面的・多角的に考察する力を育む。 【視点２】 思考ツールを用いて各自の解決策を分析させ，思考を深めさせる。 B規準　外国人を受け入れる上で発生しうる課題を解決するための施策を考え，他者に伝え，他者の意見を聞いている。
整理 ７分	７　自分が働くときに，どのような労働環境になっているとよいか論述する。 ８　単元を通して学んだことを振り返る。	【視点２】 ワークシートを振り返り，社会には様々な立場の人が同じ場所で働いていることを確認させる。 【視点１】 これまでの学びを振り返り，自分の考えを創造させる。

以下は，各グループから出された外国人労働者受け入れの際の「利点」と「課題」である。

外国人労働者を受け入れる際の利点	・新しい考え方が出てくる ・お互いの文化を学ぶことができる ・税金を納めてもらうことができる ・安い賃金で雇用できる
外国人労働者を受け入れる際の課題	・コミュニケーションを取りづらい ・日本人の仕事に就けない人が増える ・日本の技術を盗まれる ・文化の違いでトラブルが起きる

以下は，課題の一つ「コミュニケーションをとりづらい」ことへの解決策として，各グループから提案されたものである（授業で使用した思考ツールを模して，代表的な意見を集約した）。



(3) 検証結果と考察

この授業実践においては，地歴・公民科学習に関する意識として４段階の尺度で質問を 27 項目行い，学習前後における回答を分析し，検証を行った。以下は，特に高まりがみられた項目について示したものである。

質問９　普段の生活では，自分の考えでいろいろなことを決定して行動している。
質問 14　授業で，友達の考えを聞いて，違うと思うことやおかしいと思うことには，自分の意見や考えを伝える。
質問 18　興味あることについて調べ，整理したり，分析したりすることが好きである。
質問 26　社会の動き（出来事，ニュースなど）に関心がありますか。

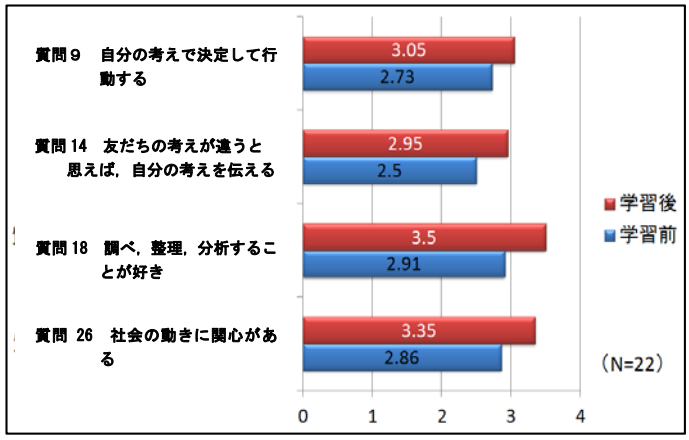


図３　学習前後の意識調査（一部抜粋）

視点１について

質問９，14 の２項目に高まりがみられたことから，他者と意見が違う場合でも自分の考えを表明したり，自分の考えを行動に結びつけたりする態度が育まれたと考えられる。また，質問 18，26 の２項目に高まりがみられたことから，社会の動きに対する関心や，主体的に情報を収集し活用することへの意欲の向上がうかがえる。

視点２について

第３時のワークシートから，抽出した生徒の記述内容を追跡すると，「外国人労働者の受け入れを拡大するためにはどうすればよいか，考えてみよう」という課題に対して，まずその利点と課題について検討し，次に課題を解決する方策を立てるという課題解決のプロセスを学び取っていることがうかがえる。

また，この単元の終末には「自分が社会の中心となって働いているときに，どのような労働環境になっているとよいか」と生徒に問い，自由に記述させた。以下には，「社会参画」や「持続可能な未来」の視点から考えられた記述内容の出現頻度を示した。

表２　社会参画・持続可能な未来の視点から考えた記述内容

視点	出現した語句群
社会参画の視点	働きやすい（６），社会（４），協力（２），お互い（２），思いやる（２），優しい（１），支え合う（１）など
持続可能な未来の視点	女性(10)，外国人（８），労働基準法（５），憲法（２），少子高齢化（１），非正規（１）平等（１），保障（１）など

いずれの視点においても，意識の高まりが見られる。

視点３について

本検証では，生徒のより深い思考を促すため，各種統計や新聞記事など多くの資料を提供した。これらはＩＣＴを活用して全体に提示したが，資料の読み取り等に時間がかかる生徒もいるため，ワークシートにも同様の資料を掲載した。このことにより，生徒はじっくり資料に向き合うことができていた。

また，視点２で述べた単元の終末の自由記述では，すべての生徒が自分の考えを記述しており（平均 142 文字，最多 271 文字，最少 67 文字），課題に対する意識の高まりがうかがえる。

検証２　高等学校　第３学年「地理Ｂ」
単元名　「環境問題」

(1) 本単元の授業設計

①　単元の指導計画

地球規模の環境問題について，生徒は中学校までに基礎・基本的な知識を習得している。しかし，それらの問題に対する国際的な取組への理解や，持続可能な未来へ向けて，先進国と発展途上国がそれぞれに負う責任についての深い思考にまでは至っていないと考えられる。そこで，単元の基軸となる問いを「世界の環境問題に対して，日本が果たすべき役割について考えよう」とし，「日本として」あるいは「日本人として何ができるか」という課題意識をもって授業に臨めるように，単元の指導計画を作成した。

表３　単元の指導計画（４時間扱い）

次	時	学習活動	評価規準
１	１	○日本の環境問題について整理し，環境技術の高さについて知る。 ○世界の環境問題について，グループで分担して調べる。	知識・理解① 日本の環境問題や公害を減らしてきた経緯について，ワークシートに記入している。 知識・理解② 世界の環境問題について，正確にワークシートに記入している。
２	２	○世界の環境問題について，先進国と途上国の立場の違いについてペアで考える。 ○「京都議定書は成功したといえるのか」について，資料に基づいて考える。	思考・判断・表現① 途上国の開発と，地球環境の保護の間に対立点があることに気づいている。 資料活用の技術① ワークシートに，資料から読み取った内容を記入している。
３	３ 公開授業	○地球温暖化の対策として，日本が果たすべき役割について，資料を活用して自分の考えをまとめる。 ○グループで意見を出し合い，作業シートで対立軸を明確にする。	思考・判断・表現② 資料を活用し，根拠に基づいて自分の考えをまとめている。自分の考えが伝わるように工夫して発表している。 資料活用の技術② 作業シートの活用の仕方を理解し，課題を明らかにしている。

	4	○前時の協議で明確になった対立軸について，合意点を見出す。 ○環境問題について学び，考えたことを論述する。	思考・判断・表現③ 根拠を示しながら，グループで合意点を見出そうとしている。 関心・意欲・態度 持続可能な社会へ向けて，当事者意識をもって考えている。

② 学習課題の設定

本検証では，単元全体を通して課題解決へ向けた言語活動が展開されるように，各時間の学習課題を設定した。第１時の学習課題は「世界の環境問題について，グループで分担して調べよう」，第２時は「京都議定書は成功したといえるのか考えよう」，第３時は「地球温暖化に対して日本が果たすべき役割について考えよう」，第４時は「環境問題について学び，あなたが考えたことは何か」である。また，第１時では主たる評価の観点を「知識・理解」，第２時では「資料活用の技術」，第３時では「思考・判断・表現」，第４時では「関心・意欲・態度」におき，バランスのとれた学力を育むことを意図した。

(2) 指導の実際

ここでは，指導計画の第２時と第３時について述べる。

第２時　これまでの環境問題への取り組みを評価する

本時では，「京都議定書は成功したといえるのか」という学習課題について，資料（京都議定書締約国の目標達成状況について①森林吸収源，京都メカニズムクレジットを含まない②森林吸収源を加味③森林吸収源，京都メカニズムクレジットを含む，それぞれのグラフ）を根拠として活用し，グループで評価を下す言語活動を設定した。以下は生徒たちの討議の中で意見として出た，京都議定書の「意義」と「課題」である。

京都議定書の意義	・多くの国と話し合い，目標達成のために協力したこと ・環境に対する意識が高まった ・各国（締約国）での二酸化炭素の削減
京都議定書の課題	・途上国が参加していない ・アメリカ，中国，インドが入ってない ・先進国と発展途上国の意識の違い ・排出量が平等に設定されていない

どのグループも，各自が意見を出し合うことで，多面的・多角的な視点をもって討議が進められた。

第３時　これからの環境問題への取組について主権者として助言する【公開授業】

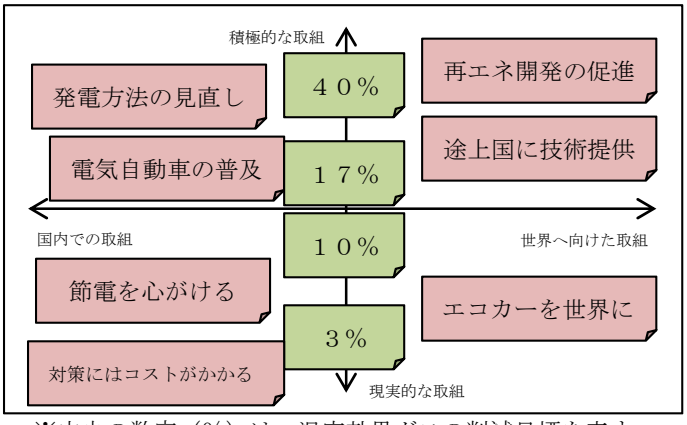
① 目標

既習の知識や資料をもとに，地球温暖化の対策として日本が果たすべき役割について考え，意見を表明する。また，協働・協調的に課題を解決しようとする言語活動を通して，社会的事象を多面的・多角的に考察する力や，社会に参画する力を身に付ける。

② 展開

過程	学習活動	指導上の留意点
導入 10 分	1　資料から，日本のＣＯ２削減目標が下方修正されたことに気づき，そのことについて評価する。 2　本時の学習課題を確認する。	【視点３】 課題設定の理由（ＣＯＰ21 において「パリ合意」が目指されていること）を紹介し，生徒が主体的に，当事者意識をもって学習できるようにする。
	地球温暖化の対策として日本が果たすべき役割について，グループで考えを出し合い，日本政府にアドバイスしよう。	
展開 35 分	3　学習課題について考える。 (1) 資料を活用しながら，自分の考えを付箋紙に記入する。 (2) グループで考えを伝え合う。 (3) グループ内で出た考えを，作業シートを用いて整理する。 (4) グループの意見を発表する。	【視点１】意見を述べる際には，根拠となる資料を示すように指導する。 【視点２】「積極的な取組」と「現実的な取組」，「世界へ向けた取組」と「国内での取組」という２つの軸で，出された考えを整理させる。 B規準　温暖化対策に日本が果たすべき役割について，自分の考えを表明している。他者の考えとの違いを認識している。
整理 5 分	4　本時の学習を振り返る	【視点２】学習を通しての考えの変化を，ワークシートに記入させる。

以下は，授業で使用した思考ツールを模して，各グループで出た代表的な意見を集約したものである。



※中央の数字（％）は，温室効果ガスの削減目標を表す。

(3) 検証結果と考察

検証１と同様にこの授業実践においても，地歴・公民科学習に関する意識として４段階の尺度で質問を 27 項目行い，学習前後における回答を分析し，検証を行った。以下は，特に高まりがみられた項目について示したものである。

質問３　普段の生活で，社会のニュースや出来事について，知らないことがあったら友だちや先生，家の人などに聞いて調べる。
質問７　普段の生活で自分の考えを言うときには，これまで学習したことを役立てて考えをまとめている。
質問 10　授業で意見や答えを出すときには，最後は自分自身の考えで決定している。
質問 16　授業で，友だちと意見が食い違った時には，お互いに分かり合えるように，話し合うようにしている。

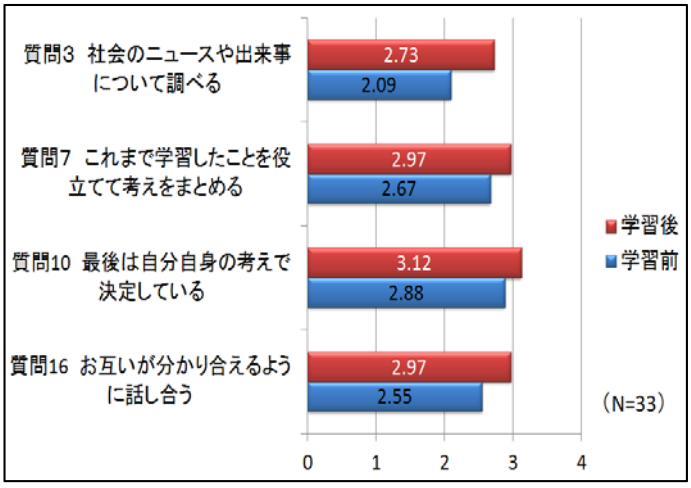


図４　学習前後の意識調査（一部抜粋）

視点１について

質問 10, 16 の２項目に高まりがみられたことから，課題解決へ向け立場の違いを越えて他者と合意形成を図り，最後は自分自身で判断を下すという態度が育まれたと考えられる。また，質問３，７に高まりがみられたことから，これまでに学習した内容をふまえて，社会の出来事に主体的に関わろうとする意欲の高まりがうかがえる。

視点２について

第３時および第４時のワークシートや作業シートから，すべての生徒の「日本が目指すべき温室効果ガスの削減目標」を抜き出すと，第３時の始めの平均値が 14.6%，第３時の終わりが 15.0%，第４時の終わり（最終判断）が 11.9%であった。この結果から，協働・協調的な学習の過程を通した，生徒の思考の変容がうかがえる。

また，第３時の授業の後に，抽出した生徒に行ったインタビューでは次のようなコメントが得られた。

質　問　今日のような学習はどうでしたか。
生徒Ａ　全然違う意見があって，自分の意見以外にもいろんな意見があるんだなと思いました。
生徒Ｂ　自分の意見がうまく通らないことに，もどかしさを感じました。
質　問　今日の学習を，これからどう生かしますか。
生徒Ａ　自分の意見だけでなく，他人の意見も取り入れながら，新しい考えを創っていくということに取り組んでいかなくてはいけないなと思いました。
生徒Ｂ　他人の意見を取り込みつつ，自分の意見もそれに合わせて，新しい考えを出していくことが大事だと思いました。

さらに，この単元の終末には「これまで『環境問題』について学び，あなたが考えたことは？」と生徒に問いかけ，自由に記述させた。以下は，「社会参画」や「持続可能な未来」の視点から考えられた記述内容の出現頻度を示したものである。

表４　社会参画・持続可能な未来の視点から考えた記述内容

視点	出現した語句群
社会参画の視点	一人一人（18），協力（12），意識（11），国民（５），技術（４），お互い（３），日本人（２）など
持続可能な未来の視点	世界（16），先進国と途上国（13），人間（４），みんな（２），持続（２），責任（２）など

いずれの視点においても，意識の高まりが見られる。

視点３　学びのＵＤ化と効果的なＩＣＴの活用

本検証では，生徒のより深い思考を促すため，各種統計をはじめとする多くの資料を提供した。読み取りが難しい資料については，ＩＣＴを活用して全体に提示しながら教師が解説をすることで，生徒の理解が促されていた。

また，資料を活用しながら個人で思考する時間をとっ　　話する時間を設定したことで，すべての生徒が自分の考えをもって協議に参加する様子が見られた。

検証３　中学校　第２学年「歴史分野」
単元名　「産業の発達と幕府政治の動き」

(1) 本単元の授業設計

本単元は，社会の変動や欧米諸国の接近，幕府の政治改革，新しい学問・思想の動きなどを通して，幕府の政治が次第に行き詰まりをみせたことを理解させることがねらいである。

習得した知識を活用して思考・判断・表現する学習活動を単元終末に設定した。幕府の政治改革について学び手が「批評する」立場となって吟味し，行き詰まりをみせた江戸幕府に対して「助言する」立場となって深く歴史的事象に入り込みながら，主体的に追究活動に取り組むことができるようにした。そこで，単元を貫く問いとして，「４つの改革をさらによくするアイデアを考え，江戸幕府を助けよう。」という学習課題を提示し，当事者意識を持って意欲的に学習に取り組むことができるようにした。

①　単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点
1	**「農業や諸産業の発達」** 農業の進歩や諸産業の発達の様子を調べ，幕府や藩が産業の発達を奨励した理由を考える。	・江戸時代の国内産業は，どのような背景の中で発達したのか，また，どのような産業がどこで発達したのかを資料などから読み取ってまとめる。
	４つの改革をさらによくするアイデアを考え，江戸幕府を助けよう	
2	**「都市の繁栄と元禄文化」** 三都をはじめとして，江戸時代に都市が発達した理由を政治や経済のしくみなどから考える。	・三都の発展は産業の発達や交通の整備とどのように関係しているのか考え，三都の特色を表にまとめる。
3	**「享保の改革と社会の変化」** 幕府政治の改革が必要になった理由を，貨幣経済の広がりなどから考える。	・貨幣を使う機会が増えたことで農村や都市にはどのような変化があったのか，それぞれの理由も考え，自分の言葉で表現する。
4	**「田沼の政治と寛政の改革」** 田沼意次の政治と松平定信の政治を比較し，目的・方法などについて共通点と相違点を考える。	・百姓の要求と幕府の財政難に対して，田沼意次や松平定信はどのような政策を行ったのか，工夫して表にまとめる。
5	**「新しい学問と化政文化」** 国学と蘭学の発達や化政文化の特色について調べ，社会の動きとの関連を考える。	・江戸時代後半にはどのようにして学問や教育がさかんになったのか，また，江戸を中心にどのような文化が発展したのか，資料などを読み取ってまとめる。
6	**「外国船の出現と天保の改革」** 外国船の接近とそれに対する幕府の対応について，外国船打払令などから理解する。 大塩の乱，天保の改革について調べ，幕府政治にどのような変化が見られたのかを考える。	・外国船の接近と国内の不満に対して，幕府はどのような政策を行ったのか，幕府に対する批判にはどのようなものがあったのか，資料などから読み取る。
7 本時	**「幕府政治と社会変化」** 幕府の政治改革を通して，江戸時代の社会変化について根拠をもとに説明できる。	・江戸幕府がおこなった政治改革を現代の政治に生かすことができないかを考え，社会へ参画する態度へ繋げる。

②　学習課題の設定

本検証では，単元全体を通して当事者意識を高めながら課題解決へ向けて主体的な学びが展開されるように，単元を貫く問いとともに，一単位時間の問い（学習課題）を設定し，問いが連続する中で，学習意欲が継続するようにした。また，単元前半には，基礎的基本的事項を課題別ごとに習得し，協働的に学び合う場を設定することで，知識を構成しながら概念形成を図ることができるように，ジグソー型の学習活動を設定した。さらに，第１時から第６時までは主たる評価の観点を「知識・理解」及び「資料活用の技術」，第３時，第４時，第６時，第７時では「思考・判断・表現」及び「関心・意欲・態度」におき，バランスのとれた学力を育むことを意図した。

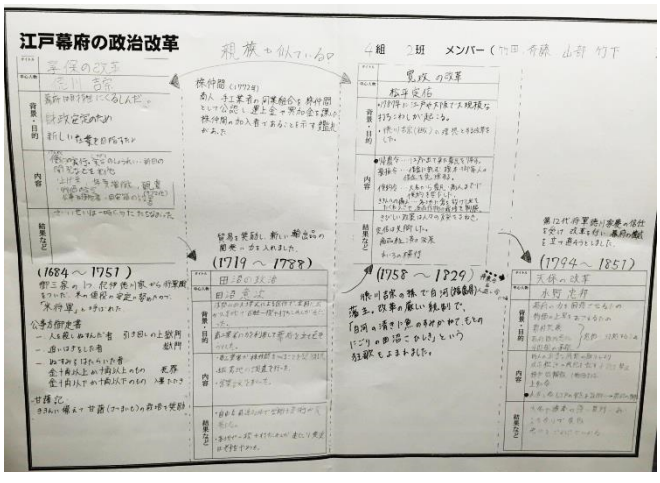


図５　第６時までにまとめたシート

幕府の政治改革ごとに役割を分担し，課題ごとに班編制し，追究を深めることができるようにした。それらを通常の班に持ち寄り，責任を持って教え合いながらまとめることで，知識を構成して幕府政治と社会変化について概念形成を図った。図５が第６時までにまとめた生徒のシートである。政治ごとに比較検討できるように工夫していることが分かる。

⑵ 指導の実際

ここでは，検証を行った指導計画の第７時について述べる。

① 本時の目標

検証授業における本時の目標を「江戸幕府の政治改革の比較検討を通して，江戸時代の社会変化について根拠をもとに説明できる。」と設定するとともに，「４つの改革をさらによくするアイデアを考え，江戸幕府を助けよう。」という課題を提示した。

② 本時の展開

過程	学習活動	指導上の留意点及び評価	備考
導入5分	1 本時の課題を確認する。	○前時までの学習を振り返り，江戸幕府の政治改革「享保の改革」「田沼意次の政治」「寛政の改革」「天保の改革」についての基本的事項を確認する。 ○本時では，幕府の政治改革について評価するとともに，自分の考えを説明することの意義を確認する。	教科書 デジタルスライド
	学習課題 ４つの改革をさらによくするアイデアを考え，江戸幕府を助けよう。		
展開25分	2 学習課題について話し合う。 (1) 自分なりの考えをもち，資料をもとにまとめる。	能動型学習（ポイント） ○江戸時代の様々な立場から改革を検討し，自分の視点を明らかにして当事者意識を持ってまとめることで，主体的な学びを促す。	
	(2) グループで考えを交流する。 (3) 学級全体で考えを共有し学級の考えをまとめる。	○政治改革の「背景・目的」「内容」「結果」をもとに，よかった点と改善点をとらえるようにする。 ○教科書の記述や資料を根拠として，改革によって社会がどのように変化したか説明できるように，自分の考えをまとめる。 ○政治改革の結果うまくいかなかった点に着目させ，さらによい改革にするためのアイデアを考える。 ○グループで話し合ったことを発表させ，共有化を図る。	資料
	【言語活動】(設定の意図) 互いの価値判断を基に意見を交流する中で，知識を構成的に獲得して論述することで，論理的思考力を働かせる。	徹底指導（ポイント） ○発表では意見の根拠を示すよう助言する。 ○社会的事象及び語句を正しく使うことができるよう助言する。	
整理20分	3 学習のまとめをして，個人の考えをまとめる。	○江戸幕府がおこなった政治改革を現代の政治に生かすことができないかを考え，社会へ参画する態度へ繋げる。 評価：思考・判断・表現（ノート・観察） B基準 江戸時代の政治改革による社会の変化を，時代を表すキーワードをもとに論述している。 A基準 B基準に加え，江戸時代の特色と現代の社会とを関連付けて論述している。	
	4 学習を振り返り，現代の社会との関連を考える。	〈B基準に達していない生徒への手立て〉 ○グループで話し合った際のメモを使い，キーワードを見つけられるよう助言する。	

③ 協働・協調的な学びの場面における生徒の発話記録の分析

ジグソー活動により，前時までに習得した基礎的基本的事項を確認した後，協働・協調的に学び合いながら，課題について議論した場面を記録し分析を行った。以下は，その発話記録である。（一部抜粋）

【水野忠邦が行った天保の改革に対してアドバイスが必要だと判断して議論している班】

男子Ａ：もしかしたら冷害が起こるかもしれん。すると作物が育たなくなる。困る。お米が消える。食べ物がなくなる。そうなると農村は困るから，江戸に出稼ぎにきている人たちは，農村に帰すべきだということで，人返し令を行ったけど。

女子Ａ：だけど，全員を帰してしまったら，江戸が困るから，少しだけ帰せばよかったのではないと。

男子Ａ：江戸には，年貢米で大量に備蓄されているから，村を守るためにはそうした方がいいと思う。

女子Ａ：だけんたい。だけん，出稼ぎでいっぱいお金を稼いでたい，村に帰った方がよかと思うとたい。

男子Ａ：いざとなったらお米が頼りになるたい。

女子Ａ：いや，いざとなったらお金が頼りになるんじゃないのかな。

江戸時代の政治家によりよい方向性として助言をしようと，互いの価値観をぶつけ合っている一場面である。４人班で２人が議論し合っているが，残りの２人は，これらの意見を聞きながら，教科書や資料集，ノートなどを開きながらどちらの意見が納得できるものなのかを見定めていた。お互いの意見に折り合いを付けながら全体の場での発表に向けて，協調し合いながら意見を収束させていく姿が見られた。このように協働・協調して学び合う活動を通して，政治改革の「背景・目的」「内容」「結果」をもとに，よかった点と改善点をとらえることができたようであった。また，歴史的な事象をうまく自分の言葉で説明できない場合は，何度も何度も教科書や資料集を読み返し必要な資料等を示しながら，自分の考えの根拠として説明できるように，まとめる姿も見られた。

生徒の思考としては，相手に分かりやすく伝えようと身近な事例等を出しながら話していたが，発話の中には，現在の政治と関連付けながら説明している場面も多く見られた。また，相手の意見に対して「だけど」「でも」とつなげながら，批判的思考を働かせながら議論している姿も見られた。日頃の人間関係づくりが機能していたことが考えられる。

(3) 検証結果と考察

検証１・２と同様にこの授業実践においても，社会科の学習に関する意識として４段階の尺度で質問を 27 項目行い，学習前後における回答を分析し，検証を行った。以下は，特に高まりがみられた項目について示したものである。

質問１　普段の生活で，社会のニュースや出来事を聞いたとき，「なぜ？」「どうして？」と疑問に思う。
質問２　授業で，教科書の文章やテストの問題文は，書いてある内容や問題の意味が分かるまで，繰り返し読んでいる。
質問 17　興味のあることについて，本やインターネットを活用して調べることが好きである。
質問 26　社会の動き（出来事，ニュースなど）に関心がありますか。
質問 27　地域の出来事や歴史，文化，地理，経済，時事などに関心がありますか。

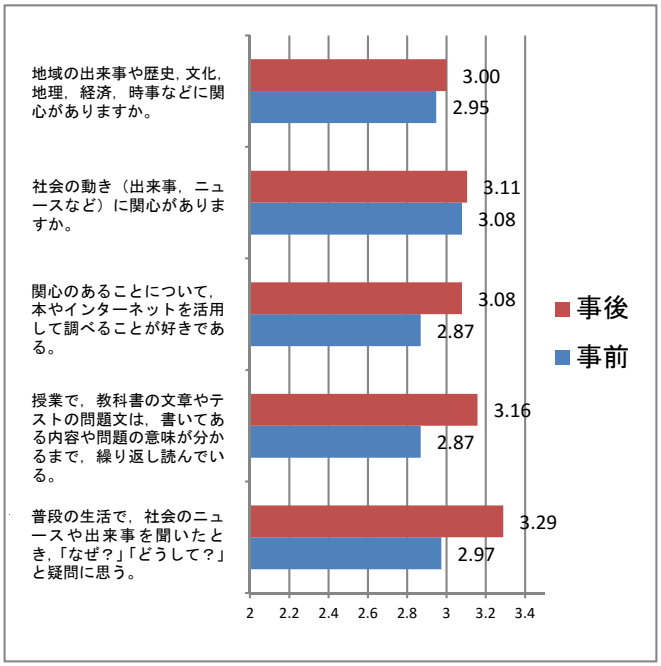


図６　学習前後の意識調査（一部抜粋）

高い値で変容しているのは，日常生活の場面における問題発見への意識の高まりとともに，自ら主体的に問題解決を図ろうとする意識が高まっていることである。また，教科書の文章やテストでの問題文に対する学習への意欲が大幅に高まっていることも特筆すべき項目である。さらには，社会の動きや地域の出来事等に関心をもつ生徒が増えていることからも，社会参画力の向上につながっているものと考える。

事後のアンケート調査において，「協働・協調的な学びで，どんな力が身に付いたか。」「社会に対して見る目が変わったと思うところはどんなところか。」などの質問項目についても，自由記述により自らの学びを振り返ることができた。テキストマイニングによる自由記述の分析から，出現した内容を一覧にまとめたものが図７・図８である。

名詞	スコア	出現頻度
意見	0.25	4
コミュニケーション力	2.10	3
協力	0.17	3
考える力	2.10	3
集中力	0.36	2
考え	0.12	2
相手	0.02	2
問題	0.00	1
基本	0.01	1
興味	0.01	1
世界	0.00	1
表現	0.02	1
思考	0.05	1
気持ち	0.01	1
勉強	0.01	1
いろいろ	0.06	1

動詞	スコア	出現頻度
話し合う	6.00	6
付く	0.14	3
伝える	0.15	3
まとめる	0.11	3
話す	0.07	3
合う	0.05	2
伝わる	0.03	1
解く	0.11	1
起きる	0.00	1
持つ	0.00	1
言える	0.01	1
知る	0.00	1
知れる	0.03	1
取り入れる	0.12	1
聞く	0.00	1
改める	0.42	1
しゃべる	0.04	1

図７　「身に付いた力」の自由記述による出現数

名詞	スコア	出現頻度
ニュース	0.06	4
興味	0.19	4
知らない	0.01	1
戦争	0.02	1
争い	0.17	1
世の中	0.02	1
出来事	0.14	1
視点	0.06	1
ごと	0.02	1
パソコン	0.01	1
世界	0.00	1
日本	0.00	1
以外	0.01	1
びっくり	0.02	1
単語	0.05	1
意味	0.01	1
大人	0.01	1
どんどん	0.02	1
日々	0.04	1
なか	0.02	1
着目	0.70	1

動詞	スコア	出現頻度
思う	0.01	5
調べる	0.16	3
分かる	0.02	2
させる	0.02	1
考える	0.00	1
持てる	0.09	1
起こる	0.04	1
向ける	0.02	1
持つ	0.00	1
出る	0.00	1
見れる	0.01	1
かわる	0.07	1
いく	0.00	1
読む	0.00	1
関わる	0.04	1
違う	0.00	1
言う	0.00	1
思い出す	0.01	1
見る	0.00	1
もつ	0.01	1
出来る	0.00	1

図８　「社会に対する見る目が変わったところ」の自由記述による出現数

「いろんな人と日々関わっているなかで，『あ，あの人あんなこと言ってたな』とか思い出して，いつも見ていなかったところに，着目してみたりすることがある。」「違う視点からものごとを見れるように少しなってます。」「ニュースに出てくる単語の意味が分かったりしたときとかは，おもしろいな～と思う。」という感想からも分かるように，協働・協調的な学びによる，相手意識の高まりとともに，多面的な見方や考え方が生まれ，社会参画への意識も高まっていることが分かった。

検証４　中学校　第３学年「公民分野」
単元名　「わたしたちの政治参加」

(1) 本単元の授業設計

本単元は，住民自治を基本とする地方自治の考え方を理解させ，地域社会への関心を高め，地方自治の発展に寄与しようとする住民としての自治意識の基礎を育てることを主なねらいとしている。これは，地域社会における住民の福祉は，住民の自発的努力によって実現するものであり，住民参加による住民自治に基づくものであること，そして，このような住民自治を基本とする地方自治の考え方が，地方公共団体の政治のしくみや働きを貫いている基本的な考え方であることについて理解させることである。

現在の地方公共団体が抱える問題は山積しており，それを取り巻く環境は厳しいと言える。人口は都市圏など一極に集中し，過疎化が進んだ地域では産業が衰退したり，鉄道やバスが廃止されたり，医者がいない地域が見られたりするなど社会サービスの低下が著しい。一方，過密化が進んだ都市圏でも交通渋滞や通勤ラッシュ，大量のゴミの処理，地域住民のつながりの希薄化など様々な問題がある。このような現状の中，地方公共団体が地域住民のためにどのような取組を行っているのかを理解させることは非常に大切であり，学習の過程で地域住民の一人として，様々な問題の解決やまちの発展に自分がどう関わるのかを考える大切な機会になると考える。

生徒たちが暮らしている「宇城市」も過疎化が進んでおり課題も多い。また，本単元は，身近な地方自治について学習を進めることから，生徒の日常生活に関わりの深いものが多く，様々な情報に接する機会も多い。そのため，生徒のこれまでの生活経験や知識を生かしながら学習を進めていくことが可能である。したがって地方自治について身近な生活との関連から学習していくことは，地域社会への関心を深めるとともに，今後のよりよい社会の形成に参画する資質や能力の育成につながるものであると考える。ここでは，２０４０年問題を取り上げて，生徒が宇城市の未来を具体的に予測し，問題意識を持つことをねらいとしている。また，宇城市に関する様々な資料をもとに，宇城市の強みと弱みを４つの視点「もの」「こと」「ひと」「かね」から追究することを通して，活性化プランを考える活動を行う。

①　単元の指導計画

次	時	主な学習活動	評　価
		単元を貫く「問い」 宇城市の未来を切り拓く「うきうき活性化プラン」を提案しよう！	
1	1	「わたしたちと地方自治」 ○宇城市の条例や市勢要覧などを調べ，地方自治の意味と役割について理解する。	○地方の政治に関心を持ち，地方自治の根本は住民自治であることに気付いている。 ○地方公共団体の仕事について，国との違いに触れながら，地方分権の考え方について理解することができる。 【知識・理解】
2	1	「地方自治の制度」 ○地方自治の制度について，身近な宇城市のしくみから理解する。	○地方公共団体のしくみを，地方議会と首長の役割を中心に理解することができる。 【知識・理解】
3	1	「地方財政」 ○宇城市の財政について調べ，地方財政の抱える問題について話し合い，これからの財政の在り方について考える。	○地方財政の課題と将来の財政のあり方について，宇城市に関する資料をもとに説明することができる。 【思考・判断・表現】 ○宇城市の財政に関する資料から，その財政事情を適切に読み取ることができる。 【技能】
4	1	「宇城市の未来について予測しよう」 ○宇城市のよりよい未来づくりのために，２０４０年問題の解決策としてどんな取組が必要か考える。	○宇城市の未来を予測し，未来を切り拓くための方策を意欲的に考えたり話し合ったりしている。 【関心・意欲・態度】
5	1	「うきうき活性化プランを提案しよう」 ○４つの視点「もの」「こと」「ひと」「かね」を役割分担し，宇城市に関する資料をもとに，宇城市の強みと弱みを分析する。	○自分の与えられた役割を果たすため意欲的に活動している。 【関心・意欲・態度】 ○宇城市に関する資料から，宇城市の強みと弱みを読み取ることができる。 【技能】
	1本時	「うきうき活性化プランを提案しよう」 ○宇城市の未来を切り拓くために，自分にできることは何かを考える。	○地域住民の一人として地域をよりよくするために何ができるかを，自分の言葉で説明することができる。 【思考・判断・表現】

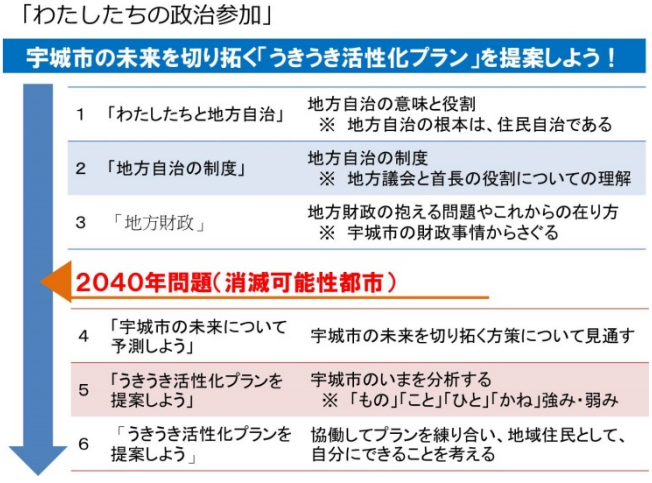


図９　単元の指導計画構想図

②　学習課題の設定

地域社会への関心を高め，将来住みよいまちにするにはどのようなことが必要で，どんな条件が整え

ば自分もここで生活していきたいと思うことができるか，そのために中学生の立場で自分に何ができるのかということに視点を置いて，思考できるような教材・教具の開発とともに授業展開の工夫等を行った。また，単元を貫く「問い」を設定し，地域のよさや課題を見つけ，どうすればよりよいまちづくりができるのかについて，実際に自分たちの提案を行政の方に聞いてもらうことで，住民の一人として意欲的，主体的に地方自治に取り組む基礎を育て，社会参画への意識を高めることができるようにした。

(2) 指導の実際

ここでは，検証を行った指導計画の第６時について述べる。

① 本時の目標

地域住民の一人として地域をよりよくするために何ができるかを，自分の言葉で説明することができる。

② 本時の展開

過程	主な学習活動	学習形態	指導上の留意点及び評価	教材資料等
導入3分	１これまでの学習を振り返り，本時の学習課題をつかむ。	一斉	○これまでの学習を振り返り，自分たちが宇城市の未来を切り拓かなければならないという意識を高めさせ，学習課題を確認する。	前時まで使用した資料
展開37分	学習課題 宇城市の未来を切り拓く「うきうき活性化プラン」を提案しよう！			
	２視点ごとからの情報を伝え合い，プランを考える。	班	○４つの視点から出された強みと弱みを関連付けてプランを考えさせる。 ［期待される姿］ ・プラン名「れんこんプラン」 ・レンコンに関する「もの」の強みと「ひと」の強みを結びつけるとプランが作れるぞ。など	４つの視点に関する資料 ワークシート まとめシート
	３各グループのプランを表現交流する。	一斉	○他のグループのよさを見つけ，自分のグループのプランを練り直す際に活用させる。	まとめシート
	４ゲストティーチャーの話を聞き，再度，活性化プランを練り直し発表する。	班	○行政という専門的な立場からの情報を確認し，助言やアドバイス等を自分たちのプランの改善に生かすように促す。	ＧＴ（市役所職員） まとめシート 座標軸シート
まとめ10分	５宇城市の未来を切り拓くために，自分たちにできることは何かを考える。	個人	○これまでの捉え方と変わったことや深まったことについてまとめさせる。 評価：思考・判断・表現（シート） Ｂ基準 地域住民の一人として地域をよりよくするために何ができるかを，自分の言葉で説明することができる。	ワークシート ＧＴ（市役所職員）
	６ゲストティーチャーから全体の講評を聞く。	一斉	○地域の課題や悩みを知り，中学生に対する期待の大きさを感じさせるとともに，宇城市の未来を切り拓こうとする意欲を高めさせる。	

③ 豊かなかかわり合いのある言語活動「対話」を充実させる教材（資料）の作成と展開の工夫

ここで設定する対話の第一歩として，自分自身との対話がある。これまでの学習経験や生活体験を通して，自分の住む故郷をどれぐらい知っているのか，客観的に自分を振り返ることが重要である。そこで，故郷宇城市のいまを分析するために，図 10 のような資料を「もの」「こと」「ひと」「かね」の視点から作成し，図 11 のような思考表現ツールを用いて「強み」「弱み」を捉えられるようにした。

図 10 追究資料として作成した資料（抜粋）

図 11 分析シート

表５ 生徒による分析（抜粋）

	「かね」の視点から
強み	○日帰り観光のようなものを取り入れることで時間に余裕のある，中高年層がそれを利用し，売り上げがあがっている。農産物直販施設は，広域から人を集め販売額の倍増をはかる。 ○農産物直販施設は広域から人を集め，販売額の倍増（温泉などと組み合わせて日帰り観光的な利用法で）を図る。民生費が多くあるため，福祉がより推進されるとよい。
弱み	○約９年間で商店数・従業者数・販売額の激減 市民一人当たりの予算が前年度に比べ３万８７６０円減った。歳入で自主財源が４分の１しかなく地方債（市債）にたより市民一人当たりの予算が減ってしまう。 ○年々，商店数の減少→従業者の減少になってきているので，販売額も減ってきている。

自分自身との対話及び教材との対話により，故郷のいまを分析した後，他者との対話による協働的な学びの場を設定した。分析シートを使って，視点ごとの「強み」「弱み」（表５参照）を比較検討しながら，宇城市の未来を切り拓く「うきうき活性化プラン」を創造し，課題解決を図っていく過程をとった。また，他者との対話には，ゲストティーチャーとして宇城市役所の若手職員を招聘し，専門的な立場からアドバイスを受けたり，プランに対する評価を受けたりしながら，リアリティーのある学習活動を設

定した。表６は，実際に生徒が協働して学び合いながら創造したプランの一部である。

表６　生徒が考えた活性化プラン（一部抜粋）

プラン名	具体的内容
UKI’s CULTURE TRAVELING	第１次産業（農業やりたい人）向け，移住する人向け，宇城観光向けの旅行プランで，宇城の特産品（デコポン・レンコン）の収穫体験を行ったり，世界遺産の三角西港・歴史的な芸能・文化財を紹介し，住み心地のよさ（地域の人に協力してもらってホームステイを行う）や宇城の魅力をアピールしたりする。（温泉も多くあるため，温泉と組み合わせる）移住する人向けの旅行には，住む家の情報や住む地域の紹介を行う。
産業活性化プラン	○インターネットなどで特産品をアピールして若者に興味を持ってもらう。 ○移住者が増えれば職を求める人が増えるので商店数が増える。（土地の安さを利用して移住者を増やす。） ○加工品などが増えることで第２次産業の割合が高くなる。
宇城市改革プラン	○三角西港が登録されたことを，PR ムービー（授業と連動して）を作ってインターネットに掲載する ○高齢者や子どもが利用しやすい施設をつくって，子どもから高齢の方までを呼び込む。（観光）

地理・公民等様々な分野で習得した知識等を活用してプランを考えていることや，思考表現ツールで分析を図った内容をもとに，現実的なプランを考えているグループが多かった。これらのプランを図 12 のように，「取組の難易度」と「対象者」の２つの視点による座標軸で吟味し，ゲストティーチャーにより即時的に評価をいただいた。

図 12　２軸の視点によるプラン分析

本時の最後には，これらのプランを受け，宇城市の未来を切り拓くために，自分たちにできることは何かについて考え，自分との対話で締めくくった。

表７　自分たちにできることはないかの自由記述

生徒	生徒の自由記述（一部抜粋）
A	宇城市の未来を考えていく中で，たくさんの人が宇城が良くなるためには，どうすればよいのか考えていることが分かりました。私にできることは少ないかもしれないけど，家族や友だち，いろんな人たちに宇城市のよいところを多く知ってもらい，話して伝えていくことで，活性化の一つに協力できるのではないかと考えました。
B	旅行や他の地域に行った時，どこに住んでいるのか聞かれたとき，いつもは田舎と言って，紹介しなかった。でもこういった学習をしてそんな時こそ，ＰＲできるところなので，たくさん聞いてもらい，宇城市のよさを伝えていく。
C	わたしはこの学習をするまで，大人になったら宇城市を出てちがう場所に住み働きたいという意志が強くありました。しかし，様々な資料を見たり，いろんな視点から見ることで，宇城市のよいところにいっぱい気付けたし，これから，今の弱みを変えていくことが私たちにできることと感じ，宇城市民として市に少しでも多く貢献していきたいと思いました。
D	いま学生であるため，宇城市をアピールすることは難しいかもしれません。でも，こういった自分の住んでいる地域を勉強していき，大人になったとき，公務員など，アピールできる立場となったときに，住んでみての感想，いいところを多くの人へ伝えることができます。また，CMなど，お金がかかるのは，ポスターなどにして，人が集まる場所に貼れば，アピールできる。
E	今回プランを考え見て，どうやって活性化させればいいのか考えるのは，すごく難しかったです。市役所の方々はこのように，どうやったら宇城市をよりよくしていけるかと考えていらっしゃると思いますが，私たちも買い物に行くときに，宇城市でとれたものを買うことで少しでも宇城市の未来に貢献することができると感じました。何か大きなことじゃなくても，自分にもできることがあることが分かり，地元を大切にしていきたいと思いました。そして，他の地域の人に知ってもらうために，まず自分が宇城市のいいところを勉強したいです。

(3) 検証結果と考察

表７に示した「自分たちにできること」の自由記述についてテキストマイニングによる分析を行った。名詞群や動詞群に出現頻度が高かった内容から考察すると，「特産品」「かね」「情報（インターネット）」「ひと」など，生徒自身が宇城市を分析した視点から捉えた内容が多く出現していることや，自らが「いく」「知る」「考える」などの，社会に参画しようとする行動を伴った動詞の出現が高いことが分かった。（図 13 参照）また，図 14 の共起ネットワークにより，これらの語群が太くつながり合って記述されていることが分かり，生徒の社会参画意識の高まりを確認することができた。

名詞	スコア	出現頻度	動詞	スコア	出現頻度	形容詞	スコア	出現頻度
宇城市	35.70	51	いく	0.60	18	いい	0.04	8
宇城	9.80	14	できる	0.30	18	よい	0.13	7
ひと	1.12	9	思う	0.15	16	良い	0.03	4
アピール	3.86	9	知る	0.55	14	多い	0.05	4
地域	0.90	7	考える	0.31	11	難しい	0.08	3
特産品	4.90	7	もらう	0.42	10	すごい	0.00	1
インターネット	1.41	6	つくる	0.56	6	楽しい	0.00	1
かね	4.07	6	行く	0.03	6	たのしい	0.03	1
お金	0.31	6	住む	0.65	6	安い	0.01	1
特産	4.07	6	買う	0.04	5	強い	0.01	1
PR	3.50	5	伝える	0.40	5	少ない	0.01	1
自分たち	2.80	4	見る	0.01	4	---	---	---
勉強	0.10	4	聞く	0.02	3	---	---	---
多く	0.25	4	盛り上げる	0.90	3	---	---	---
魅力	0.31	4	広げる	0.51	3	---	---	---
プラン	0.64	4	行う	0.04	3	---	---	---
仕事	0.03	4	働く	0.11	3	---	---	---
個人	0.12	3	広める	0.32	2	---	---	---
友だち	0.63	3	分かる	0.02	2	---	---	---
協力	0.17	3	出る	0.01	2	---	---	---
紹介	0.05	3	入れる	0.03	2	---	---	---

図 13　「自分たちにできること」の自由記述分析による出現数

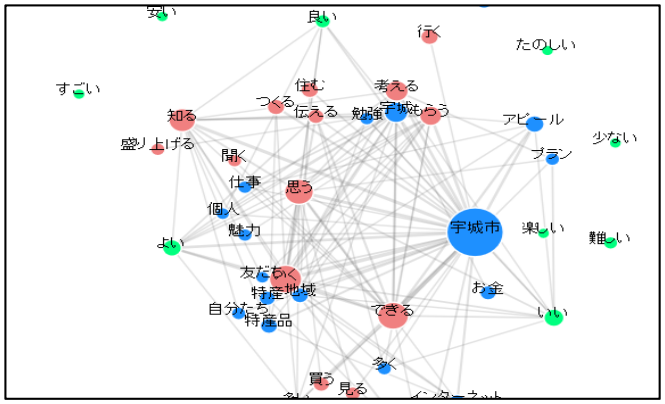


図 14　テキストマイニングによる共起ネットワーク

検証３　小学校　第３学年「社会科」
単元名　「店で働く人と仕事」

(1) 本単元の授業設計

本単元は，児童にとって身近にあるスーパーマーケット（以下：スーパー）やコンビニエンスストア（以下：コンビニ）などを教材として取り扱い，そこで働く人々の，販売に関わる工夫や努力について具体的に追究する単元である。

検証学校の校区には，スーパーもコンビニもあり，家族と一緒に買い物に行く機会も多いと思われる。また，2 年生の時には，校区探検でスーパーに行き，店長にインタビューする経験をしている。このように地域にあるスーパーは，児童にとってより身近であり，興味・関心の高いものと言える。

本単元では，地域にあるスーパーへ実際に見学に行く活動を設定することで，商品の品質管理，売り場での並べ方，値段の付け方，宣伝の仕方などの販売について直接調べることができ，販売の仕事に携わる人々の工夫等を深く理解することができる。また，販売者側の工夫と消費者側の工夫を関連させて考えることで，自分の生活との深い関わりを意識させるとともに，地域の販売に関わる仕事が，自分たちの生活を支えていることを実感し，地域への誇りと愛情を育むことが期待できる単元である。

①　単元の指導計画

そこで，以下のような単元指導計画を作成した。

表８　単元の指導計画（１２時間扱い）

次	時	学習活動	指導上の留意点 【３つの視点から】
１つかむ	１	○買い物調べの結果やスーパーの写真を見て気付いたことを話し合い，学習問題をつくる。	・スーパーのよいところを発表させるとともに，その意味を問いかけて予想させることを通して，学習問題づくりにつなげる。
	２	○自分たちの問題を整理して，どんな答えになるのか，どうやったら調べられそうかを予想して，学習の計画を立てる。	・学習課題を分類・整理し，結果の予想と解決の見通しを持たせる。 **【視点１】** **単元を貫く言語活動の設定**
		【単元を貫く言語活動】 お店ではたらく人たちは，多くの人々が買い物をしやすくするために，どのようなくふうをしているのだろう。 **『お店のひみつを壁新聞にして山鹿のみんなに伝えよう！』**	
２見通す	３ ４	○ひみつを探るための観点を話し合う。 ○インタビューのエチケットなど調べ活動のマナーを知り，取材活動に必要な物を考える。	・追究活動における調べる視点を明確に持たせる。 **【視点２】** ・追究活動時の視点の焦点化
３さぐる・深める	５	○店内を見学して，商品別に並べたり，見やすくきれいに並べたりするなど，売るための工夫を調べる。	・調べる視点をもとに店内を探検し，発見カードに記録（絵や図，文章）できるようにする。 **【視点３】学習シートの工夫**
	６	○店で働いている人にインタビューして，買い物客を集めるための工夫や注意点について調べる。	・商品の注文や陳列をしたり，商品を加工・包装したりするなど，働く人々の仕事の内容を具体的にする。 **【視点３】学習シートの工夫**
	７	○新鮮で安心して商品を提供するための工夫に気づくとともに，品物は国内外から運ばれてくることを調べる。	・看板やシールなどの写真を活用して商品の産地を明らかにする。 **【視点３】学習シートの工夫**
	８	○お客さんにインタビューして，買い物をするときの願いや思いについて調べる。	・リサイクルコーナーやお年寄りや障害のある人専用の駐車場などについて消費者の視点から捉えるようにする。 **【視点３】学習シートの工夫**
４まとめる	９ 10	○お店探検で調べた内容を視点ごとにまとめ，山鹿の人たちに伝えたい秘密を壁新聞に表す。	・見学で発見した販売の工夫を分類させて，考えを整理できるようにする。 **【視点３】** **児童一人一人が責任を持って取り組める壁新聞づくりの工夫**
５広げる・いかす	11	○調べたことを振り返りながら，学習問題についてまとめ，消費者と販売に携わる人々の関連を考える。	・インタビューを通して分かったことをもとに，お客さんの願いと店の工夫について話し合いながら結びつきを考えさせる。
	12 本時	○販売の工夫を捉えたうえで，消費者として自分のこれからの生き方を見つめる。	・今までの学習を想起し，「働く人の工夫」と「お客さんの願い」との関連を明らかにしながら，消費者としてのこれからの生き方について見つめることができるようにする。 **【視点１】** **意志決定型の「問い」の工夫**

②　児童の実態

検証授業前にアンケートによる意識調査（４件法）を行った。

表９　アンケート調査による児童の実態

項　目	とても	まあまあ	あまり	思わない
授業のめあて（目標）について，考えている。	９	２６	２	０
難しい問題に出会うと，解いてみようというやる気が出る。	２３	８	５	１
なぜと思ったことやわからないことは，先生に聞いたり，本を読んだりして調べてみる。	１４	１６	５	２
みんなに自分の考えが分かりやすいように，発表している。	１１	１７	９	０
友だちの考えや発表に対して，質問をしたり意見を言ったりしている。	１１	１７	９	０
問題を解決するために友だちと協力して調べたり，考えたりしている。	１５	１７	４	１
友だちと考えが違ったときには，お互いがわかり合えるように，話し合うようにしている。	１１	２０	４	２

児童の多くが授業のめあて（目標）について考えていることは，日頃の授業で意識化されているためであり，めあてが焦点化されていることが分かる。

また，難しい問題に出会ったときや「なぜ」の問いに対する課題解決への意欲や意識が高い児童が多いことも分かった。さらには，課題解決に向かって友だちと協力して取り組もうとする意識や他者の意見や考えと関わり合おうとしている意識も高いことが分かる。しかし，相手に分かりやすく伝えたり，友だちの意見に対して批判的思考を伴って対話を重ねたりすることに苦手意識を持つ児童もいることが分かった。豊かなかかわり合いのある言語活動を設定することで，他者との対話を重ねながら課題解決を図るとともに，価値観の違う他者と協働しながら自らの生き方について考える活動を取り入れることが必要である。

(2)　指導の実際

そこで，次のような手立てをもとに授業を構成し，実践を行った。

○問題解決的な学習の展開を軸として単元を構成し，課題解決のプロセスを身に付けることができるように，単元を貫く言語活動を設定することで児童が主体的に学習を展開していけるようにする。

○意志決定を図る「問い」により，調べて考えたことを出し合い共有しながら互いの価値に出会うことで，他者を認め合いながら自分の生き方に向き合うことで当事者意識が高まるようにする。

○互いの考えを練り上げるための伝え合い・学び合う活動（対話）を充実させる。そのためには，意見の出し合いに終わることがないように，友だちの考えを聞いて，自分の考えと比較したり関連させたりして，意見を「つなげながら」児童が主体的に学習を展開していけるようにする。

○自己評価を行い，学習を振り返る時間を設けることにより，児童一人一人の社会的な思考力・判断力・表現力の深まりといった学習状況をつかむことができるようにする。また，その状況により，支援が必要な児童に対しては個別に対応し適切な支援を行うようにする。

○児童に毎時間，授業の感想の場を設けることで，授業の振り返りと次時への意欲付けにつながるようにする。

本時の展開

①目標

今までの学習を想起し，「働く人の工夫」と「お客さんの願い」との関連を明らかにしながら，消費者としてのこれからの生き方（買い物の仕方）について考えることができる。

②　展開

過程	学習活動	指導上の留意点及び評価
導入5分	1　これまでの学習を振り返り，本時の学習のめあてをつかむ。	○販売者の工夫を意識ながら，前時までのふり返りを行う。 ○お年より家族，４～５人家族，親戚１０人食事会，地域の祭りでの焼きそばづくりを４場面提示し，買い物への当事者意識を高める。
今までの学習をふりかえりながら，買い物の仕方について考えよう。		
展開37分	2　野菜を買いに行く場面を想定した問いに向き合う。 おうちの人の手伝いで買い物に行きます。４つの場面では，あなたはどのキャベツを選んで買いますか。 (1)自分の考えに理由を付けて考える。 (2)グループの友だちと考えを交流する。 言語活動 設定の意図 意志決定型の問いにより互いの価値と向き合い，他者と交流することを通して社会で生きていく自分として当事者意識を高めるようにする。 3　友だちと考えを交流したことをもとに，自分の家族の買い物を想定して考えを整理する。 4　販売者への思い，地域への思い，家族への思いを込めながら互いの考えを全体で交流する。	能動型学習（ポイント） ○これまでの追究活動により習得した販売者の工夫や学習経験・生活経験等をもとに，野菜を買う場面での意志決定を問う学習課題をもとに，互いの価値を明確にしながら，協働して自らの生き方に迫ることができるようにする。 徹底指導（ポイント） ○自分が価値判断したことへの理由付けを明確にさせる。根拠となった資料・生活経験等を相手に明確に示しながら伝えるようにする。 ◆社会的な思考・判断・表現（学習シート） B基準　買い物の場面において，消費者の視点からこれからの生き方（買い物の仕方）について，理由を付けながら考えている。 A基準 B基準に加え，追究してきた販売者側の工夫と関連付けて考えている。 ＜B基準に達していない児童への手立て＞ 個別に言葉掛けを行い，学習経験や生活経験を引き出させながら，考えることができるようにする。 ○全体での交流により表現することで，社会への参画意識がより一層高まるようにする。
終末3分	5　教師によるまとめと本時の振り返りを行う。	○教師によるまとめをする。 ○山小フェスタで学習したことを保護者に伝えることを知らせ，児童の次なる活動への意欲を抱かせる。

(3) 検証結果と考察

【視点１】

単元を貫く問いの設定における，意思決定型の「問い」を提示することで，課題解決型の学習過程を図るとともに，協働・協調して学び合う場を設定することで，相手を納得・説得させる説明を主軸とした言語活動を設定する。こうした豊かなかかわり合い

から対話が生まれる授業を通して，思考力・判断力・表現力を育成することができた。

協働・協調的に学び合いながら，課題について議論した場面を記録し分析を行った。以下は，その発話記録である。（表 10 参照）

表 10　グループによる対話の発話記録（一部抜粋）

児童	発話記録
児童A	ぼくは，①番（山鹿産）だと思います。理由は，①と②は大きさは似てると思うけど，④と③は少なすぎて②の方が微妙に大きい気がしたからです。
児童B	ぼくは，④番（カット野菜）にしました。その訳は，みんなで分けられるから，食べやすいように。
児童C	わたしは，①番（山鹿産）にしました。その訳は，①は，地元山鹿で採れたキャベツを，大きいし，おいしいと思ったから①にしました。 はい（次），○○くん。
児童D	ぼくは，①（山鹿産）にしました。 訳は，え～っと，いっぱい，大きいし，いっぱい使えるからだと思います。
児童A	みんなに（ボードが）見えるようにしたがいい。Dくんぜんぜん見えないよ。
児童B	俺以外，みんな同じじゃん。 俺以外，みんなおんなじ。 俺だけ違う・・・
児童E	わたしは，①番だと思います。 どうしてかというと，地元のものを使っているから，なんか，安心できると思うからです。
児童A	どうする。 じゃ～Bくんに質問する。一人だけ違うけん。もうちょっとくわ～しく言ってみてん。

表 11 は，意志決定型の「問い」により，消費者としての生き方を自分に問いかけ，価値観の違う多様な他者と協働して学び合った結果，児童が最終的に価値判断した内容項目を分類・整理したものである。

表 11　意志決定場面における判断基準として児童が価値をおいた項目の出現率

児童が価値をおいた内容項目	人数	割合(%)
家族構成（弟妹などへの配慮）	5	7.1
（料理をする人への配慮）	1	1.4
（人数）	16	22.9
買い物経験	2	2.9
残菜	5	7.1
産地（安全・安心）	16	22.9
健康	1	1.4
大きさ・量	8	11.4
金額（ねだん）	6	8.6
地元生産者への思い	2	2.9
他の料理への使用	2	2.9
家の人の好み	1	1.4
買い物の回数	5	7.1

表 10・表 11 の児童の姿から分かるように，習得した知識を活用して他者と対話し，多様な見方や考え方の中で価値判断していることが分かった。

これは，図 15 のように，生産者と販売者の立場だけの学習に終始するのではなく，自分が買い物をするときの立場（消費者の立場）で考えることができるような，学習活動を組み込んで，当事者意識を持って追究活動することができたからだと考える。

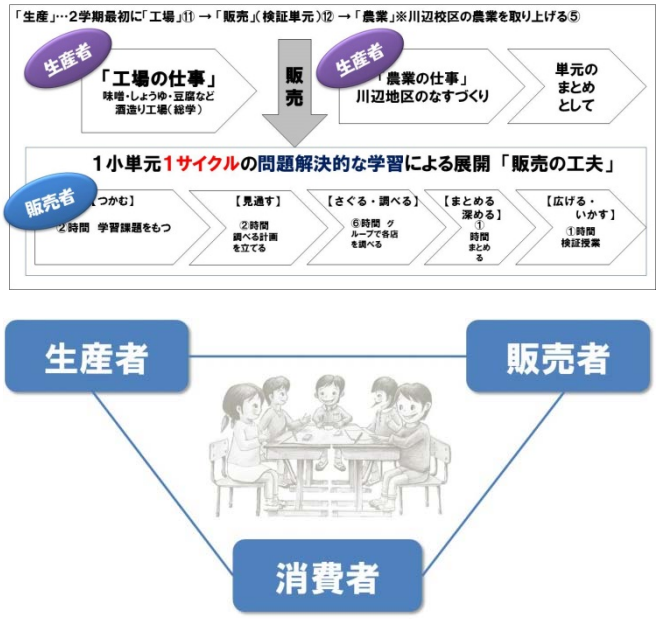


図 15　当事者意識を生む単元構成のモデル図

【視点２】

単元の学習や本時の学習のねらいを明確につかみ，振り返りの視点を設定し，教師と児童が共有することができるようにした。

また，意志決定型の「問い」に対する事前の個の考えと，多様な他者と協働して学び合いゆさぶられた後の考えとの変容を可視化することができるように学習シートの工夫を図った。

これらにより，社会に対する見方や考え方を感じ取ることができた。

【視点３】

相手意識と目的意識を明確にした学習課題をより具体的に設定することで，児童が追究する視点を焦点化し，意欲的に学習に取り組むことができた。

また，児童一人一人の学習への参加と理解を保障するために，実感を伴った追究活動が可能な学習シートの工夫を図ることができた。

3 研究のまとめ

社会科，地歴・公民科における研究の主張点は，当事者意識を生む「問い」により，様々な立場で追究活動をより深まりのあるものにするとともに，意志決定型の「問い」により，多様な価値観を持った他者と協働しながら学び合い，社会参画力（持続可能な未来への責任）という求められる資質・能力が育まれるかどうかを検証するものであった。

また，協働・協調的な学びにおける座標軸やマトリックス表などの思考表現ツールを活用した，思考の深まりを検証するものであった。

５本の検証授業における発話記録や意識調査，自由記述等を分析したものは，実践ごとに示したところである。そのすべてに，児童生徒の社会に参画しようとする意識の向上や行動化への変化が見られたことは，大きな成果であると言える。やはり，授業者が「児童生徒にどのような資質・能力を育成したいのか」というねらいを明確に持って，当事者意識を生む「問い」により，協働・協調的な学びを展開した結果であるといえる。

また，生徒が自らの学びを客観的に振り返り，他者と協働して学び合う学習の中で，「自分自身に身に付いた」とする力について自由記述で記したのが表12（一部抜粋）である。

表 12 協働・協調的な学びにより生徒自身が「身に付いたとする力」の自由記述（一部抜粋）

児童	身に付いたとする力
A	考える力。納得できる話し方を学ぶことができた。
B	友達の意見と自分の意見をまとめる力
C	少しのできごとをいろんな所から見る力がついたと思う。
D	自分の考えに理由を付ける力
E	３年生になって，１・２年のころより理解する力が付いた。
F	自分と他の人の意見を比べて，よりよい答えを導き出すこと。
G	複数の視点から物事を見ることができるようになった。

名詞	スコア	出現頻度
意見	2.89	14
考え	0.47	4
考える力	2.10	3
比較	0.23	3
相手	0.02	2
他人	0.09	2
整理	0.14	2
思考	0.21	2
グラフ	0.48	2

動詞	スコア	出現頻度
まとめる	0.19	4
聞く	0.04	4
思う	0.01	4
考える	0.02	3
付く	0.14	3
伝える	0.15	3
話す	0.07	3
できる	0.01	3
読み取る	2.00	2

図 16 「身に付いた力」の自由記述分析

表12の自由記述例やテキストマイニングによる分析から，生徒が自ら身に付いたとする力には，自分や他者の「意見」を「まとめる」「聞く」「考える」「伝える」ことが「できる」と捉えている生徒が多いことが分かった。

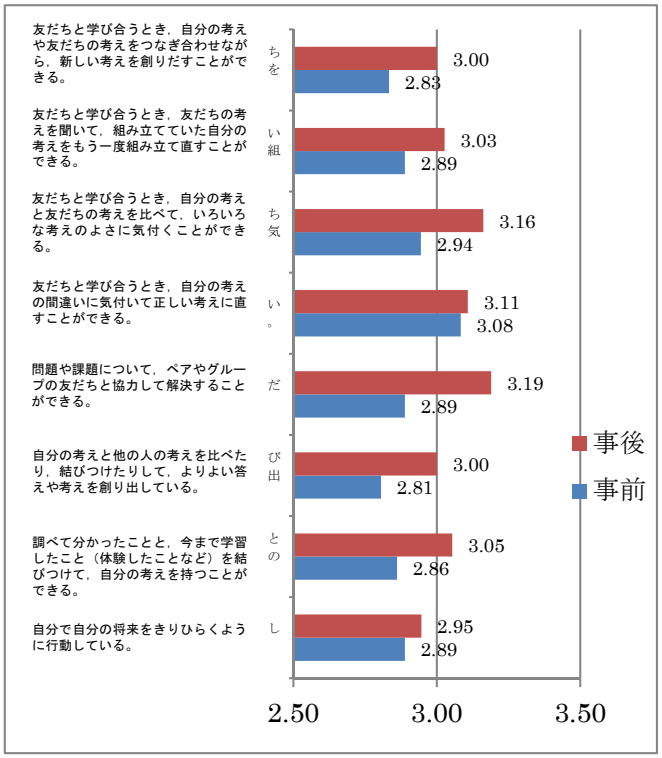


図 17 学習前後の意識調査（一部抜粋）

また，検証授業クラスの生徒を対象に，７月と12月に実施した意識・実態調査の結果を示した図17のグラフによると，すべての項目で検証授業後の意識が大きく高まっていることが分かった。特に，顕著な伸びを示しているのが，「問題や課題について，ペアやグループの友だちと協力して解決することができる。」や「友だちと学び合うとき，自分の考えと友だちの考えを比べて，いろいろな考えのよさに気付くことができる。」であった。当事者意識を生む「問い」により，学習課題を自分事として受け止めながら，他者と協働して課題解決に当たっていく力が高まったとする意識が向上していることが分かった。

《引用・参考文献》

『中学生・高校生の生活と意識 - 日本・アメリカ・中国・韓国の比較（2009 年２月）』（（財）一ツ橋文芸教育振興協会，（財）日本青少年研究所）